

平成 23 年度海洋水産資源開発事業(大中型まき網)の調査概要



調査船 : 恵比須丸(19トン)
 調査期間 : 7/9~11/20
 調査海域 : 北部太平洋海域(仙台湾)

調査のねらい

- 1 そうまき網操業(3隻11人体制)による活餌生産システムの実効性の確認及び課題の抽出
- 2 活餌生産に適したまき網漁具の検討
- 3 活餌運搬船への効率的な移送方法の検討
- 4 カタクチイワシ及びマイワシの放射性物質検査

平成 23 年度調査の主な成果等

1 3隻(網船・投網補助艇・探索船)11人で構成される1そうまき網操業による活餌生産システムの実効性の確認及び課題の抽出を行った。本操業システムを繰り返し行うことにより(55回操業)、乗組員の習熟が進み、操業時間が短縮した(図1)。活餌運搬船を満船(約7t)にした操業は7回あり、特に9/27の操業では、活餌運搬船の積込量を大幅に上回る大規模な魚群でも漁獲できることを

確認した。一方で、環喰いの発生率などに課題が認められた。本操業システムで生産されたカタクチイワシは、近海かつお一本釣り漁業において特段の問題無く利用された。

2 本調査のまき網漁具は活餌生産専用とするため、浮子綱長320m×網丈(縮結を考慮)111mで、他の1そうまき網漁船のまき網漁具の約8割の規模とした。このまき網漁具で、活餌運搬船を満船する漁獲が可能であったことから、浮子綱長に関しては適当であったと思われる。網丈に関しては、漁場の水深(平均30.8m)及び操業対象魚群の分布水深を考慮すると、深過ぎた可能性がある。魚捕部の目合いは19節(16.8mm)としたが、小型個体(体長5~6cm)は網目から抜け出していた可能性があることから、適当な目合いの選定が重要である。

3 漁獲物の移送は、写真1のように網中の魚群を泳がせて活餌運搬船へと移す方法で行った。効率的な混獲魚の排除法等が課題として認められた。

4 カタクチイワシ及びマイワシの放射性セシウム及び放射性ヨウ素の濃度は、暫定規制値以下であった。

5 東日本大震災の影響を受けて、三陸における近海かつお釣船用の活餌供給量が大幅に減少した状況下で、総活餌供給量の約10%を供給し、かつお水揚げ復興の一助となった。

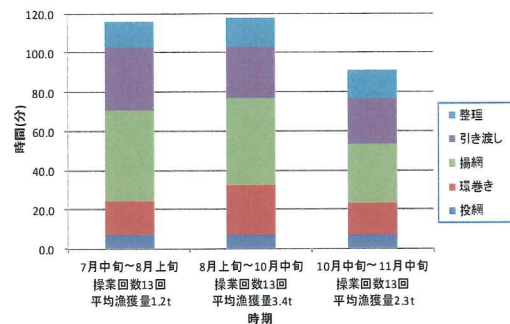


図1 操業工程別平均所要時間



写真1 活餌運搬船への移送法